

(二三、39・1) 8

万葉女流歌人―その愛の一面― 青木生子

国文学(九一、39・1) 7

題詞の権威―旅の歌の一解釈― 伊藤 博

万葉(五、39・1) 15

上代における美の認識 森田康之助 芸林

(五一、39・2) 18

伝説歌の源流 伊藤 博 国語・国文(三三、

三、39・3) 15

万葉人の世界観―デーモンと夢について―

森本治吉 国文学(九四、39・3) 10

旋頭歌と難訓歌 神田秀夫 国語と国文学

(四一五、39・5) 9

万葉集 犬養 孝 国文学(九八、39・6) 6

譬喩歌と寄物陳思歌―衣服の色彩をとおして

みた―伊原 昭 上代文学(六、39・6) 9

万葉集卷十四と挽歌 桜井 満 上代文学

(六、39・6) 7

「かけ」の話 土橋 寛 美夫君志(七、39・6)

9

原万葉―卷一の追補― 中西 進 美夫君志

(七、39・6) 19

万葉解放の二面 松田好夫 美夫君志(七、

39・6) 8

万葉集と現代人 高木市之助 美夫君志(七、

39・6) 10

万葉集はよめるか 亀井孝 美夫君志(七、

39・6) 8

恋情発想と昔―民謡化の一典型― 桜井 満

美夫君志(七、39・6) 8

万葉集卷第一、二の含む機制 太田善磨

国語と国文学(四九、39・9) 12

上代伝承試論―聖徳太子片岡説話をめぐって

―高 壮至 万葉(五、39・10) 21

国見歌の伝承と展開 高崎正秀 国学院雑誌

(六五二、二合併号、39・11) 19

天武殞宮の文学史的意義―諫と挽歌の関係を

中心に―吉田義孝 国語と国文学(四二、

39・11) 9

万葉集卷十四の追補 桜井 満 文学・語学

(三四、39・12) 11

万葉集における歌詞の異伝 曾倉 岑 国語

と国文学(元九、36・9)

万葉集「筑前国志賀の白水郎の歌十首」考

(一) 池田 毅 歌と評論(三二、36・10)

3

万葉歌人の伝承精神 岡田松之助 文芸研究

(三九、36・10) 7

仮説からの出発―万葉集題詞の問題―

久米常民 美夫君志(四、36・10) 12

二 語法・訓詁

万葉集の訓義 藤井信男 文学(二三、20・

10) 3

「よき人」の語義―特に能仁・能人の義につい

て―白石大二 国語と国文学(三二、21・

2) 6

「雲根火雄男志等」について 中島光風 文学

(四・五、21・5) 3

万葉集戲書の出典 水野駒雄 国語と国文学

(三・七、21・7) 2

尙る船木 佐伯梅友 国語・国文(五・六、七

合併号、21・9) 11

「歌」小稿―現象学止揚の前提として

北山正通 国語・国文(五・八、21・9) 20

上代国語における「靡」の「靡状」「れ」の研究

森 重敏 国語・国文(五・八、21・9) 21

莫囂円隣之の訓 塩谷 賛 文学(四・二、

21・11) 3

母にさはらば 佐伯梅友 短歌研究(四・

22・1、2) 4

「うせみ」の語義について 大野 晋 文学

(五・二、22・2) 8

上代係助辞論 森 重敏 国語・国文(一六・

二、22・4）66

訓点語の性格 遠藤嘉基 国語・国文(七・23・2) 20

修飾語格小見(一) — 上代の助辞「な・に・の・が」— 森 重敏 国語・国文(七・23・2) 11

上代における希求表現について 浜田 敦 国語・国文(七・23・2) 26

「やか」「ちか」について 阪倉篤義 国語・国文(七・23・2) 6

上代における願望表現について 浜田 敦 国語と国文(五・23・2) 19

修飾語格小見(二) — 上代の助辞「な・に・の・が」— 森 重敏 国語・国文(七・23・5) 27

修飾語格小見(完) — 上代の助辞「な・に・の・が」— 森 重敏 国語・国文(七・23・6) 35

万葉集訓詁私按(五) 沢瀉久孝 アララギ(四・六、23・9) 3

「或」作「一」の一群 小島憲之 国語・国文(七・六、23・9) 3

上代国語における所謂「約音」について 岸田武夫 国語と国文学(五・三、23・12) 12

天「アメ」 武田祐吉 解釈と鑑賞(四・二、24・2) 4

柿本人麿訓詁新見(四) 大野 晋 国語と国

文学(三・二、24・10) 9

万葉最難訓歌考—万葉巻第一の九番「莫囂円隣之大相云兄爪謁氣」の歌の訓解考— 浜田坂牛 富士(四・二、25・2) 4

柿本人麿訓詁異見—語の意味の歴史的再建の限界に対する反省として— 亀井 孝 国語と国文学(七・三、25・3) 12

万葉集における「ず」の表記の特色とそれより導かれる種々の問題 田島光平 国語と国文学(七・三、25・3) 17

射等籠荷四問—万葉地名における同格の助詞「の」および「が」の用例などについて— 鈴木真咲 文学(六・六、25・9) 6

「乱友」追攷 沢瀉久孝 国語と国文学(七・二、25・11) 6

万葉人の文字表現—助字の訓詁をめぐって— 小島憲之 芸林(一・五、25・12) 9

莫囂円隣之の歌の訓 伊丹末雄 心の花(五・三、25・12) 3

「其故」—万葉のことば— 佐伯梅友 国語・国文(三・二、26・1) 10

人麿集訓詁二題 沢瀉久孝 国語・国文(三・一、26・1) 7

和平可豆佐禰爾母試解 橘 宗利 日本文学教室(六、26・1) 4

万葉「はなり」の髪考—伝承歌における語義の誤解について— 吉永 登 関西大学文

学論集(一・一、26・3) 12

さね・かつて考—万葉語彙— 佐竹昭広 国語・国文(三・六、26・8) 8

「中止」考 真鍋次郎 国語・国文(三・六、26・8) 7

「飽きたらに」 沢瀉久孝 説林(三・九、26・9) 3

序詞句格補説—「渡津海乃豊旗雲爾伊理比沙え」— 森 重敏 万葉(一、26・10) 8

「莫囂円隣」の歌訓詁私按 沢瀉久孝 万葉(一、26・10) 7

万葉集の助詞「が」「の」の或る場合 西宮一民 万葉(一、26・10) 6

「心開而」の訓について 山崎 馨 国語と国文学(元・二、27・1) 7

「甚」字の訓について 武智雅一 万葉(三、27・1) 8

卷十六「饌具雜器」をめぐって 橋本四郎 万葉(三、27・1) 5

条件法における仮定確定の呼応の存否とそれに関する万葉集の訓詁私見 木下正俊 国語・国文(三・三、27・3) 21

万葉集動辭攷断章—憶寸吾者と念来吾等者と— 鉄原鉄雄 芸林(三・三、27・4) 5

万葉訓詁断片—あたゆまひ・ことよりの・いもがここり— 大野 晋 万葉(三、27・4) 7

万葉仮名の読み方 森本治吉 解釈と鑑賞 (七・六、27・6) 3

東歌研究―語法研究による若干の新解― 後藤興善 国学院雑誌 (三三・三、27・6) 10

奈良時代における連体助詞「ガ」「ノ」の差異について 青木伶子 国語と国文学 (二・七、27・7) 11

万葉集「老師の花」の歌に於ける「麗」と「石蒜」に就いて 山口隆侑 短歌雑誌 (六・七、27・7) 4

億良の貧窮問答のうたの訓ふたつ 亀井孝 万葉 (四、27・7) 5

万葉集の用字―「去来」のこと「天漢」のことなど― 神田秀夫 万葉 (四、27・7) 8

「がね」と「がに」 佐伯梅友 学苑 (二四・八、27・9) 6

語法的にみた助動詞「り」の性格 宮田和一郎 国語・国文 (三三・六、27・9) 8

莫賣円隣之の訓 尾山篤二郎 国語と国文学 (元・九、27・9) 4

「後」と「復」 佐竹昭広 万葉 (五、27・10) 1

舟公宣奴島爾 塚原鉄雄 万葉 (五、27・10) 4

万葉の指示語―「その」について― 井手至 万葉 (五、27・10) 9

之麻・也麻小考 八木 毅 語文 (七、27・11) 3

舟公宣奴島爾私案 尾山篤二郎 万葉 (六、28・7) 1

助動詞「たり」の形成について―「てあり」と「たり」― 春日和男 万葉 (七、28・4) 17

露霜攷 武智雅一 万葉 (七、28・4) 7

梅花落―ウメノハナチル― 山崎 馨 国語と国文学 (三三・七、28・7) 5

「越野過去」訓義私按 木下正俊 万葉 (六、28・7) 2

「三袖存疑」 佐竹昭広 万葉 (八、28・7) 1

「球手折」考 竹岡正夫 万葉 (八、28・7) 7

音と光―「玉響」解説の方法― 佐竹昭広 国語・国文 (三三・八、28・8) 11

「八多籠」 橋本四郎 万葉 (六、28・10) 2

敬語法から観た万葉の旧訓 金田一京助 国学院雑誌 (三三・三、28・11) 12

形容助詞の連体法 此島正年 国学院雑誌 (三三・三、28・11) 17

助詞「イ」の性格 武田祐吉 国学院雑誌 (三三・三、28・11) 6

「標野行」考―連用形中止法の一用法― 石坂正蔵 上代文学 (三、28・11) 8

万葉集の助詞 林 大 解釈と鑑賞 (一八・三、28・12) 7

万葉集の動詞・助動詞 佐伯梅友 解釈と鑑賞 (一八・三、28・12) 5

万葉誤字 脱字二題 沢瀉久孝 芸林 (四・六、28・12) 9

層内韻尾の省略される場合 木下正俊 万葉 (二〇、29・1) 8

手玉鳴裳 佐伯梅友 万葉 (二〇、29・1) 2

「ずあり」「ざり」「ず」についての一考察 三吉 陽 愛媛国文研究 (三、29・3) 7

「けめかも」攷 木下正俊 国語・国文 (三三・三、29・3) 7

万葉集訓詁一題―「声」と「音」― 馬田義雄 和歌山大学学芸学部紀要Ⅲ人文科学 (29・3) 11

万葉集に見られる数詞について 津留繁雄 不知火 (七、29・6) 2

「火氣一如」の訓など 佐竹昭広 万葉 (三三、29・7) 3

同音節反覆の場合の用字法について―万葉集を中心として― 鶴久 万葉 (三三、29・7) 9

奈良時代のヌとノの万葉仮名について 大野 晋 万葉 (三三、29・7) 24

「紀之許能暮之」考―本文溯原の一つの試み― 井手 至 万葉 (三三、29・10) 7

万葉集における助詞「を」 諏訪嘉子 万葉 (三三、29・10) 17

序詞とその限界について―万葉集を中心として― 吉川貫一 国文論叢 (二・二、29・11) 8

オの万葉仮名 宮島 弘 立命館大学(二五、
29・12) 14
「水鳥二四毛有哉」其他 木下正俊 万葉(四、
30・1) 7
「也」字の訓について―「ぞ」と「なり」の消
長― 春日和男 国語・国文(二四・三、
2) 14
万葉集卷八(一五四六番)の歌の訓み方
菊沢季生 文芸研究(九、30・2) 7
万葉集における「ト」の混乱 三吉 陽
愛媛国文研究(四、30・3) 11
上代の形容詞語尾ジについて 橋本四郎
万葉(二五、30・4) 10
「親魄相哉」について 吉永 登 万葉(二五、
30・4) 7
序詞の地名二題 沢瀉久孝 国語・国文(二四、
五、30・5) 8
「恋無之」訓疑 賀古 明 上代文学(二五、
5) 11
万葉語研究―「新玉のごとき」・「生ひざりし
草」― 佐伯梅友 万葉研究(八、30・5) 3
万葉集読添訓索引―助動詞の部― 蜂矢宣朗
山辺 道(天理大学)(二、30・5) 11
麻乎之多麻敷礼 三宅清 万葉集大成月報
(一八、30・6) 1
万葉仮名の資料―和泉国土塔の文字瓦に就い

て― 生沢英太郎 万葉集大成月報(一八、
30・6) 4
副詞「もとな」について 武田祐吉 国語研
究(三、30・7) 8
いわゆる伝聞推定の助動詞ナリの本義
竹岡正夫 国語・国文(四七、30・7) 5
伝聞推定の「なり」 原田芳起 国語・国文
(四七、30・7) 4
「阿古比須奈牟」私按 木下正俊 万葉(六、
30・7) 5
代名詞「し」について 森 重敏 万葉(六、
30・7) 8
万葉語「ハタ」の周辺 小島憲之 万葉(六、
30・7) 11
万葉集読添訓索引―助詞の部― 蜂矢宣朗
万葉(二六、30・7) 20
「清明」の訓法と解釈 井上 豊 解釈(二・五、
30・9) 2
「浄」か「浄」か 佐竹昭広 万葉集大成月
報(二〇、30・9) 3
助詞「ばかり」鶏助 福島邦道 解釈(二・六、
30・10) 2
「足荘殿」と「檀越」 正宗敦夫 万葉(二七、
30・10) 3
埋もれた言語と埋もれた訓詁 亀井 孝
万葉(二七、30・10) 6
「神之諸伏」の訓 伊丹末雄 万葉(二七、30・

10) 2
考えられる訓詁一つ 伊藤 博 万葉(二七、
30・10) 2
「毛無乃岳」の訓 春日政治 万葉(二七、30・
10) 3
「恋故にこそ」 井手 至 万葉(二七、30・10)
4
地庭不落の訓について 山崎 馨 万葉(二七、
30・10) 3
角のふくれ 真鍋次郎 万葉(二七、30・10)
5
上代国語に於ける尊敬・謙讓の表現―万葉集
を中心に― 津之地直一 愛知大学文学論
叢(二、30・11) 46
上代歌謡の句法について 岩橋小弥太 国学
院雑誌(五・四、30・11) 34
誤字説の可否 大野 晋 万葉集大成月報
(二二、30・11) 3
万葉語の活用 林 大 万葉集大成月報(三、
30・11) 3
日本古典文法(一)―その一・係り結び―
大野 晋 解釈と鑑賞(三〇・三、30・12) 9
万葉集読添訓索引―助詞の部―(続)
蜂矢宣朗 万葉(二七、31・1) 20
日本古典文法(二)―その一・係り結び(二)
― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三、31・2) 9
間投副詞から発始としての係助詞へ

- 森 重敏 国語・国文(三三・三) 31・2) 14
 地爾將落八方 三宅 清 国語と国文学(三三・二) 31・2) 9
 万葉集「跡状」の訓について 内川昭子
 愛媛国文研究(三三・三) 6
 「しらぬひ」考 倉野紀子 解釈(三三・三) 31・3) 2
 古今六帖と万葉集―人麿訓点篇― 老川義治
 国語国文研究(三三・三) 31・3) 19
 万葉集読添訓の研究(一) 蜂矢宣朗 天理大
 学学報(七三・三) 31・3) 14
 上代の感動「い」について 瀬良益夫 解釈
 (二四・三) 31・4) 3
 「波の行方」私見 佐藤 稔 解釈(二四・三) 31・4) 3
 日本古典文法(三)―その一・係り結び(三)―
 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・四) 31・4) 8
 万葉集開卷第一の歌 大野 晋 文学(二四・四) 31・4) 6
 上代敬語動詞成立考 木下正俊 万葉(二九・三) 31・4) 23
 日本古典文法(四)―その一・「コン」の係り
 結び(四)― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・五) 31・5) 7
 日本古典文法(五)―その一・「コン」の係り
 結び(五)― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・六) 31・6) 9
 「広さ」と「狭さ」―上代における連体格助詞
 の用法について― 浅見 徹 万葉(二〇・三) 31・7) 16
 和歌と敬語―その一― 宮田和一郎 解釈
 (二六・三) 31・8) 4
 「の」の歴史―その一として「上代」―
 浅見 徹 国語・国文(三三・六) 31・8) 18
 「あやにかなし」と「見ればかなし」―万葉
 「かなし」考余滴―長江 稔 解釈(二九・三) 31・9) 1
 日本古典文法(六)―その一・「コン」の係り
 結び(六)― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・六) 31・9) 8
 和歌と敬語―その二― 宮田和一郎 解釈
 (二〇・三) 31・10) 2
 石をたれ見き 阪倉篤義 解釈と鑑賞(三三・二) 31・10) 3
 上代特殊仮名遣の万葉集への適用と解釈
 池上積造 解釈と鑑賞(三三・二) 31・10) 6
 万葉仮名と中国の字音史 頼 惟勤 解釈と
 鑑賞(三三・二) 31・10) 11
 万葉集歌の訓詁をめぐって 小島憲之 解釈
 と鑑賞(三三・二) 31・10) 3
 万葉集訓詁新見 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・二) 31・10) 2
 万葉らしい訓み方―「極而」の場合―
 清水克彦 解釈と鑑賞(三三・二) 31・10) 3
 「腫浪」訓義私按 木下正俊 解釈と鑑賞(三三・二) 31・10) 3
 万葉集における「者」字の用法―「中中者」
 の訓をめぐって― 鶴久 万葉(三三・三) 31・10) 7
 日本古典文法(七)―その一・「コン」の係り
 結び― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・二) 31・11) 8
 上代の受身・可能・自発の助動詞(一)
 宮田和一郎 解釈(三三・三) 31・12) 3
 日本古典文法(八)―その一・「コン」の係り
 結び― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・三) 31・12) 7
 古代における格助詞「が」 此島正年 国学院
 雑誌(七三・七) 31・12) 8
 心開而と地爾將落八方との訓み方―大野雅照
 氏・三宅清氏の御教示に答へて― 山崎 馨
 国語と国文学(三三・三) 31・12) 9
 万葉集読添訓の研究(二) 蜂矢宣朗 天理大
 学学報(三三・三) 31・12) 14
 上代の受身・可能・自発の助動詞(その二)
 宮田和一郎 解釈(三三・三) 32・1) 2
 記紀の古さ―格助詞「の」「が」の用法から―
 浅見 徹 万葉(三三・三) 32・1) 7
 反語について―ヤとカの違いなど―
 阪倉篤義 万葉(三三・三) 32・1) 12
 万葉集に於ける助詞「と」に就いて

- 松尾久美江 国文学会誌(三、32・2) 4
 「かなし」に関する奈良朝文法―万葉集「かなし」考余滴― 長江 稔 解釈(三三、32・3) 2
 万葉集における「令」字の用法 黒岩駒男 久留米文学会記要(二、32・3) 9
 万葉集卷三(二四九番)の歌の訓み方 菊沢季生 文芸研究(三三、32・3) 8
 「思ほゆ」の「ゆ」と動詞「忘る」 宮田和一郎 解釈(三四、32・4) 2
 「来す」と「越す」 木下正俊 万葉(三、32・4) 16
 万葉集の「見」―文体論的考察― 森 重敏 万葉(四、32・7) 31
 発生と完了―「ぬ」と「つ」― 中西宇一 国語・国文(六八、32・8) 17
 義字的仮名に就て―万葉集を中心として― 大野 透 国語・国文(六九、32・9) 14
 古典解釈のための助動詞―未然形に続く助動詞― 佐藤喜代治 解釈と鑑賞(三二、32・11) 25
 古典解釈のための助動詞―連用形に続く助動詞― 中田祝夫他 解釈と鑑賞(三二、32・11) 31
 古典解釈のための助動詞―終止形に続く助動詞― 山田俊雄他 解釈と鑑賞(三二、32・11) 41

- 古典解釈のための助動詞―助動詞はどのような研究されてきたか― 阪倉篤義 解釈と鑑賞(三二、32・11) 6
 万葉集二八七七不恋有登者の訓について―係助詞「なも」の問題― 後藤和彦 文学・語学(六、32・12) 8
 歌語のくさぐさ(四) 宮田和一郎 解釈(四一、32・12、33・1合併号) 2
 「莫響」の歌試論 白子福右衛門 解釈(四三、33・3) 4
 古典解釈のための助詞―格助詞― 土井忠生 解釈と鑑賞(三四、33・4) 23
 古典解釈のための助詞―副助詞― 松村 明 解釈と鑑賞(三四、33・4) 27
 古典解釈のための助詞―係助詞― 白石大二 解釈と鑑賞(三四、33・4) 18
 古典解釈のための助詞―終助詞― 森 重敏 解釈と鑑賞(三四、33・4) 23
 古典解釈のための助詞―接続助詞― 塚原鉄雄 解釈と鑑賞(三四、33・4) 20
 古典解釈のための助詞―間投助詞― 佐伯梅友 解釈と鑑賞(三四、33・4) 7
 「濃」の仮名遣其他 木下正俊 万葉(二七、33・4) 3
 万葉語―その口語性をめぐって― 小島憲之 万葉(二七、33・4) 8
 万葉集「はた」の意味用法をめぐって―附

- 「半手不忘」の解明― 井手 至 万葉(二七、33・4) 6
 「わが大王」と「わが大王」 宮田和一郎 解釈(四五、33・5) 1
 蟹の腊 板橋倫行 解釈(四六、33・6) 1
 万葉集卷十四における上代特殊仮名遣の混乱について 江野沢淑子 解釈(四六、33・6) 2
 万葉集卷十四卷十五の仮名について 安田厚子 香推瀉(福岡女子大学)(四、33・7) 8
 佐宿木花 真鍋次郎 万葉(二六、33・7) 3
 万葉集における用字法的一面―「往」「限」の訓との関係において― 鶴 久 万葉(二六、33・7) 7
 万葉集四七番の作品における「葉」の表記 江湖山恒明 和歌文学研究(六、33・7) 11
 「鳥翔成の一試訓 阪口 保 文学・語学(六、33・9) 6
 「らむ」の意味について 尾崎知光 文学・語学(六、33・9) 10
 訓話のこみち 沢瀉久孝 国語・国文(七〇、33・10) 9
 上代国語における母韻調和の吟味―特殊仮名遣オ列音の本質― 北条忠雄 文芸研究(三〇、33・10) 20
 副詞ホトホト(二)の意味構造 井手 至 万葉(二六、33・10) 8

変字法より観たる万葉集の表記法の問題

後 勲 国語・国文(三七・二、33・11) 11

「わがゆゑに」と「わがからに」の考察―万葉集語法の研究― 井上富蔵 岡山大学法文学部学術紀要(二、34・1) 8

万葉集一番の歌の訓方 宮田和一郎 解釈(辛一、34・1) 3

万葉集訓詁註釈史の展望―古点を中心に― 大久保 正 国文学(四・一、34・1) 8

「ことば」と「字音仮名」―上代語の清濁を中心に― 橋本四郎 万葉(三、34・1) 12

「入日哉」其他 大下正俊 万葉(三、34・1) 12

連体格を構成する助詞二つ 塚原鉄雄 万葉(三、34・1) 16

万葉集における対句の場合の訓について 鶴久 語文研究九州大学(八、34・2) 12

「まし」の性格―万葉集を中心として― 森井 蘭 女子大国文(京都女子大学)(三、34・2) 9

万葉集第九番試訓 窪田 薫 古典(明治書院)(七、34・3) 1

人麻呂作歌並に歌集の用字 瀬古 確 文学・語学(二、34・3) 17

訓仮名をめぐって 橋本四郎 万葉(三、34・4) 16

「菅矣奴」考 加地伸行・小島憲之 万葉(三、34・4) 2

上代語の清濁―借訓文学を中心として― 西宮一民 万葉(四、34・4) 19

動詞「ウラム」古活用臆断 木下正俊 万葉(三、34・4) 3

万葉集における借訓仮名の清濁表記―特に二音節訓仮名をめぐって― 鶴久 万葉(四、34・4) 13

「落易」の訓など 伊藤 博 万葉(三、34・4) 3

天字訓詁考 安津素彦 国学院雑誌(二〇・五、34・5) 14

皇考―万葉集「皇者神爾之坐者」の「皇」の訓について― 酒井貞三 文学・語学(三、34・6) 16

用字と用語―大宮之内二所聞の訓について― 大野雅熙 国語国文研究(三、34・7) 9

「佐檜の隈み」考 山田弘通 万葉(三、34・7) 5

「しゝる」「あきじこる」攷 吉田金彦 万葉(三、34・7) 18

読添へと書添への間―連想的読添へ表記と連想的書添へ表記― 蜂矢宣朗 万葉(三、34・7) 10

「見所久思」考 西宮一民 万葉(三、34・7) 3

万葉語のイハバシル・ハシリキ・ハシリダ

34・4) 2

上代語の清濁―借訓文学を中心として―

西宮一民 万葉(四、34・4) 19

動詞「ウラム」古活用臆断 木下正俊 万葉(三、34・4) 3

万葉集における借訓仮名の清濁表記―特に二音節訓仮名をめぐって― 鶴久 万葉(四、34・4) 13

「落易」の訓など 伊藤 博 万葉(三、34・4) 3

天字訓詁考 安津素彦 国学院雑誌(二〇・五、34・5) 14

皇考―万葉集「皇者神爾之坐者」の「皇」の訓について― 酒井貞三 文学・語学(三、34・6) 16

用字と用語―大宮之内二所聞の訓について― 大野雅熙 国語国文研究(三、34・7) 9

「佐檜の隈み」考 山田弘通 万葉(三、34・7) 5

「しゝる」「あきじこる」攷 吉田金彦 万葉(三、34・7) 18

読添へと書添への間―連想的読添へ表記と連想的書添へ表記― 蜂矢宣朗 万葉(三、34・7) 10

「見所久思」考 西宮一民 万葉(三、34・7) 3

万葉語のイハバシル・ハシリキ・ハシリダ

井手 至 万葉(三、34・7) 11

「あさむく」と「日のみかげ」 吉永 登 美夫君志(一、34・12) 9

「愛耶」沢瀉久孝 美夫君志(一、34・12) 3

孤悲―大伴家持の用字― 稲垣富夫 美夫君志(一、34・12) 11

「左手嶋師子について」 佐伯梅友 美夫君志(一、34・12) 4

万葉集訓義私按二題―振痛袖乎・垣盧鳴の攷― 津之地直一 美夫君志(一、34・12) 10

「美夫君志」の訓 松田好夫 美夫君志(一、34・12) 18

誤字説をめぐって―「峯(峰)と岫(岬)」の場合― 西宮一民 万葉(四、35・1) 9

正訓字の整理について 池上禎造 万葉(四、35・1) 7

万葉語彙の構造―その一― 名詞について― 阪倉篤義 万葉(四、35・1) 11

万葉集第十五番の歌「渡津海乃……清明己曾」のよみについての私見 亀井 孝 万葉(四、35・1) 6

万葉集における敬語 佐伯梅友 国文学(五、35・2) 6

万葉集における活用語尾の表記―動詞の部― 蜂矢宣朗 山辺 道(六、35・3) 16

「侍り」について 小野志真男 国文学攷(三、35・4) 8

「等乃斯久」考 佐藤 稔 国文学攷(三、35・4) 6

万葉長歌に於ける枕詞の位相と機能

松田芳昭 国文学攷(三、35・4) 9

万葉集巻五の音仮名について(上) 一億良の

音仮名用字圈 稲岡耕二 国語と国文学

(三七・六、35・6) 15

万葉集巻五の音仮名について(下) 一億良の

音仮名用字圈 稲岡耕二 国語と国文学

(三七・七、35・7) 15

「しこる」「あきじこる」の周辺 原田芳起

万葉(三、35・7) 8

人麻呂歌集訓詁二題 鶴 久 語文研究(二、

35・9) 7

「安良我伎麻由美」新考 賀古 明 美夫君志

(二、35・9) 13

完了の助動詞「り」と「く語法」津之地直一

美夫君志(二、35・9) 7

万葉岡目八目 倉野憲司 美夫君志(三、35・

9) 6

「世中常如」と「半手不忘」の訓義 津之地直一

美夫君志(二、35・9) 8

完了の助動詞「り」と「く語法」津之地直一

美夫君志(二、35・9) 7

「打布裳」の訓について 蔵中 進 万葉(七、

35・10) 5

上代特殊仮名遣入門 大野 晋 解釈と鑑賞

(二六三、36・2) 38

万葉集の語法と訓釈 木下正俊 解釈と鑑賞

(二六三、36・2) 24

万葉集重要語句の詳解 井手 至他(二名

解釈と鑑賞(三三、36・2) 136

万葉集における情態副詞と副助詞について

寺崎 蘭 女子大國文(二〇、36・2) 8

係りか、言い切りか―「か」の場合―

佐伯梅友 武蔵野文学(八、36・2) 4

今敷者見目屋跡念之 橋本四郎 美夫君志(三、

36・3) 8

万葉集から古今集へ―序歌に見られる修辭の

流れの一端― 服部喜美子 美夫君志(三、

36・3) 15

万葉語に於ける一音節接頭語―い・か・こ・

さ・た― 津之地直一 美夫君志(三、36・

3) 6

万葉「かなし」考 長江 稔 解釈(七五、36・

5) 7

万葉集の枕詞「霰零」「九雪降」はアラレフリ

かアラレフルか 福田良輔 語文研究(二三、

36・10) 5

「具フ」の仮名遣をめぐって 西宮一民 万葉

(四一、36・10) 11

「更」の原意考 今井福治郎 万葉集研究(万

葉西会)(六、36・10) 10

万葉「かりばか」雑考 扇畑忠雄 美夫君志

(四、36・10) 9

万葉語に於ける一音節接頭語―ま・み・や・

ゆ・を― 津之地直一 美夫君志(四、36・

10) 7

古代日本語における名詞の構成 阪倉篤義

国語・國文(三〇・二、36・11) 22

東歌及び防人歌の用字に就いて 水島義治

国語国文研究(三〇、36・12) 39

万葉集の訓詁(一) 三宅 清 国文学(七一、

37・1) 4

所謂形容詞のかり活用及び打消の助動詞ザリ

について―特に万葉集における義訓すべき

不安・不遠・不近・不悪・不有をめぐって

― 鶴 久 万葉(四三、37・1) 20

ミの形をめぐる問題 橋本四郎 万葉(四三、

37・1) 15

万葉語に於ける二音節接頭語 津之地直一

愛知大学文学論叢(開学十五周年記念特輯)

(三三、三合併号、37・2) 23

「猿二鴨似」の訓 武智雅一 愛媛国文研究

(二一、37・2) 6

万葉集の訓詁(二) 三宅 清 国文学(七三、

37・2) 2

万葉弟世考 市村 宏 歌と評論(三三、37・

3) 3

万葉集巻五訓詁存疑私見 古沢未知男 熊本

女子大学学術紀要(四四、37・3) 10

枕詞「飛鳥」四音考 金井清一 国語と国文学 (元三、37・3) 10

万葉集の訓読(三) 三宅 清 国文学(七、四、37・3) 4

万葉集訓読添訓の研究(四) 蜂矢宣朗 天理大

学学報(三、37・3) 13

万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(一)

福沢武一 歌と評論(三、四、37・4) 2

仮名表記と読添へ 蜂矢宣朗 万葉(四、37・4) 16

治者 木下正俊 万葉(四、37・4) 2

動詞の接辞化―万葉の「行く」と「来」―

井上展子 万葉(四、37・4) 11

万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(二)

福沢武一 歌と評論(三、五、37・5) 2

「遠く見へくあらましものを」 沢瀉久孝

上代文学(三、37・5) 2

万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(三)

福沢武一 歌と評論(三、六、37・6) 1

朝羽振る風夕羽振る浪―その表現―井手 至

大阪市立人文研究(三、五、37・6) 14

玉杵考 久保昭雄 白路(七、七、37・7) 3

枕詞クサマクラの生成 松田芳昭 国語と国

文学(元六、37・8) 11

「万葉集」開巻第一の歌をめぐる 益田勝実

解釈と鑑賞(三、二、37・9) 2

助詞「し」の説―係機能の周辺― 川端善明

万葉(四、37・10) 13

田辺福麿之歌集と五つの歌群―その用字を中

心として―古屋 彰 万葉(四、37・10) 11

「イツチ」をめぐる 白藤礼幸 上代文学

(三、37・11) 4

万葉集の義訓をめぐる 鶴久 香椎瀧(六、37・12) 10

「玉之浦ノ」存疑 蜂矢宣朗 山辺 道(六、37・12) 9

万葉語に於ける接尾語 津之地直一 愛知大

学文学論叢(五、38・2) 28

万葉集卷十四の用字に就いて 瀬古 確

熊本大学教育学部紀要(二、38・2) 11

万葉集短歌の構造その五 安良岡康作

国文学(六、38・2) 7

上代人の表記意識と用字法―特に万葉集にお

ける表記の省略される場合― 鶴久

熊本女子大学学術紀要(五、38・3) 18

伊縁立之 中西 進 成城万葉(一、38・3) 4

万葉集卷二十防人歌の清濁表記―その用字法

的背景―森山 隆 文学論輯(二、38・3) 26

助詞「も」の説―文末の構成― 川端善明

万葉(四、38・4) 15

詞林抄―『ことのかたりごと』の系譜』を讀ん

で―橋本四郎 女子大國文(元、38・5) 3

「蔵公之」の試訓 竹内金治郎 語文(日大)

(五、38・6) 11

石垣洵の隠り(承前) 賀古 明 美夫君志(六、38・6) 10

故・姪考 小島憲之 美夫君志(六、38・6) 4

「痛寸取物」試訓 大野 保 美夫君志(六、38・6) 8

万葉語に於ける数詞・助数詞及び漢数字の用

字法(一) 津之地直一 美夫君志(六、38・6) 8

「万葉考」に於ける訓研究について 河野頼人

美夫君志(六、38・6) 10

万葉用字法上に於ける漢文的なるもの

瀬古 確 不知火(五、38・7) 7

万葉集に見える訓仮名をめぐる 瀬古 確

不知火(五、38・7) 7

許氏多受久母可 橋本四郎 万葉(四、38・7) 4

助詞「も」の説―二、心もしのに鳴く千鳥か

も―川端善明 万葉(四、38・7) 18

石橋と岩橋 井手 至 万葉(四、38・10) 6

「所依」所縁 試論 木下正俊 万葉(四、38・10) 13

万葉集の訓仮名について―卷十一、卷十二を

中心に―稲岡耕二 武庫川女子大学紀要

(二、38年度) 25

- 「あれをとめ」考 土橋 寛 万葉(五、39・1) 10 田大同 美夫君志(七、39・6) 9 竹取翁歌の用字の年代―借訓仮名を中心に― 稲岡耕二 美夫君志(七、39・6) 18 「ぢ」について 石田 肇 美夫君志(七、39・6) 14 卷十三訓詁私按 沢瀉久孝 美夫君志(七、39・6) 4 万葉集に於ける用字の視覚性(二) 瀬古 確 日本文学(三三・七、39・7) 8 「なり」の表記の意味するもの―万葉集について― 田島光平 万葉(五、39・10) 11 「溢す」と「毀つ」―黄葉片々― 木下正俊 万葉(五、39・10) 4 万葉集の解釈―語法を基礎として― 宮田和一郎 国文学(六・四、39・11) 6 万葉集講話(一) 沢瀉久孝 万葉(一、26・10) 6 万葉集講話(二) 沢瀉久孝 万葉(二、27・1) 6 万葉集講話(三) 沢瀉久孝 万葉(三、27・4) 12 万葉集講話(四) 沢瀉久孝 万葉(四、27・7) 7 万葉集講話(五) 沢瀉久孝 万葉(五、27・10) 9 万葉集講話(六) 沢瀉久孝 万葉(六、28・1) 7 万葉集講話(七) 沢瀉久孝 万葉(七、28・4) 7 万葉集講話(八) 沢瀉久孝 万葉(八、28・7) 7 万葉集講話(九) 沢瀉久孝 万葉(九、28・10) 8 万葉集講話(十) 沢瀉久孝 万葉(一〇、29・4) 8 万葉集講話(十一) 沢瀉久孝 万葉(一一、29・7) 8 万葉集講話(十二) 沢瀉久孝 万葉(一二、30・1) 6 万葉集講話(十三) 沢瀉久孝 万葉(一三、30・4) 4 万葉集講話(十四) 沢瀉久孝 万葉(一四、30・7) 4 万葉集講話(十五) 沢瀉久孝 万葉(一五、31・4) 4 万葉集講話(十六) 沢瀉久孝 万葉(一六、31・6) 6 万葉集講話(十七) 沢瀉久孝 万葉(一七、31・7) 6 万葉集講話(十八) 沢瀉久孝 万葉(一八、32・10) 6 万葉集講話(十九) 沢瀉久孝 万葉(一九、32・1) 5 万葉集講話(二十) 沢瀉久孝 万葉(二〇、32・4) 5
- 「あれをとめ」考 土橋 寛 万葉(五、39・1) 10
「はばき」 橋本四郎 万葉(五、39・1) 6
万葉集に於ける「可」「応」字の用法 鶴 久 万葉(五、39・1) 7
万葉集一三・三二六八の歌の「思」の訓をめぐって 本田義寿 論究日本文学(三、39・1) 11
万葉集卷十三表記年代考―借訓文学を中心に― 稲岡耕二 国語と国文学(四・三、39・2) 18
音訓両用の仮名について 稲岡耕二 万葉(五、39・4) 11
新撰万葉集の用字―基礎作業として助詞の表記について― 浅見 徹 万葉(五、39・4) 20
万葉集「行年考」 大久保 正 上代文学(二六、39・6) 7
万葉集に於ける用字の視覚性(一) 瀬古 確 日本文学(三三・六、39・6) 12
君が名はあれど吾が名し惜しも―「はあれど」非反戻の説― 川上徳明 美夫君志(七、39・6) 13
上代における特殊仮名遣と発音―万葉歌を訓むために― 伊丹末雄 美夫君志(七、39・6) 7
上代の疑問詞について―タレソの場合― 富

7) 7

万葉集講話(二十二) 沢瀉久孝 万葉(二六、

33・1) 5

万葉集講話(二十二) 沢瀉久孝 万葉(三三、

34・4) 5

三 解説・鑑賞

麻里布浦行之時歌(万葉集選釈) 久松潜一

解説と鑑賞(二・一、21・1) 2

見わたしの近きわたりを 佐伯梅友 文学

(二四・二、21・2) 8

「吾妹」考(上) 武田祐吉 短歌研究(三三、

21・3) 4

「吾妹」考(下) 武田祐吉 短歌研究(三三、

21・4) 4

万葉集釈評(一) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二五、21・5) 5

万葉集釈評(二) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二六、21・6) 4

藤浪乃直一目耳考 尾崎暢映 短歌研究(三三、

二六、21・6) 5

万葉集釈評(三) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二七、21・7) 4

己津物考 石垣謙二 文学(四七、八合併号、

21・7、8) 5

万葉集釈評(四) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二八、21・8) 6

万葉集釈評(五) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二九、21・9) 7

万葉集釈評(六) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二二、21・11) 5

三山歌私見 沢瀉久孝 国語・国文(六六、

22・1) 21

妹に触れば吾にも触れなむ 沢瀉久孝 国語

・国文(六四、22・7) 8

雲のみわやま 土岐善麿 短歌研究(五三、23・

3) 5

泣く児守る山 五味保義 解釈と鑑賞(三三、

四、23・4) 4

「風をだに恋ふるはともし」 沢瀉久孝 短歌

研究(五四、23・4) 6

歌謡問題歌詞考 志田延義 国語と国文学

(三五三、23・12) 3

万葉の解釈 三宅 清 国語と国文学(六六、

二、24・2) 6

「沖へなざかり」 三宅 清 解釈と鑑賞(四四、

七、24・7) 3

万葉集に於ける情調美の胚胎 本林勝夫 文

芸研究(一、24・7) 9

万葉難語私見 丹野 正 日本文学研究(五、

24・10) 5

「みどりご」歌 菊沢季生 文芸研究(二、24・

10) 4

千鳥鳴なりつまつちかねて 沢瀉久孝 国語・

国文(九二、25・9) 3

「あすは来むとし云いてしか」 沢瀉久孝

説林(二九、25・9) 4

ヒト・ヲノコ・マスヲヲー万葉集私注覽書一

土屋文明 文学(八九、25・9) 5

秋山われはー心情表現の構造を中心にー

犬養 孝 語文(一、25・11) 10

「西の市にたゞひとり出て」の歌に対する私見

馬田義雄 学芸研究ー人文科学ー(和歌山

大学学芸学部)(一、25・12) 16

万葉集「本名言」考 吉永 登 国語・国文

(二〇一、26・1) 6

万葉集在註「鶴鵠」私案 木船正雄 国語・

国文(三二、26・1) 5

疑問文か平叙文か 佐伯梅友 日本文学教室

(八、26・3) 7

万葉集四二五番の左註について 井上富藏

文芸と思想(福岡女子大学)(三、26・7) 6

「やすみし」考 源 豊宗 芸林(三四、26・

8) 8

往左来左君社見良目 尾埜よしゑ 万葉(一、

26・10) 6

彼方の赤土少屋にこさめふり 木下正俊

万葉(一、26・10) 8